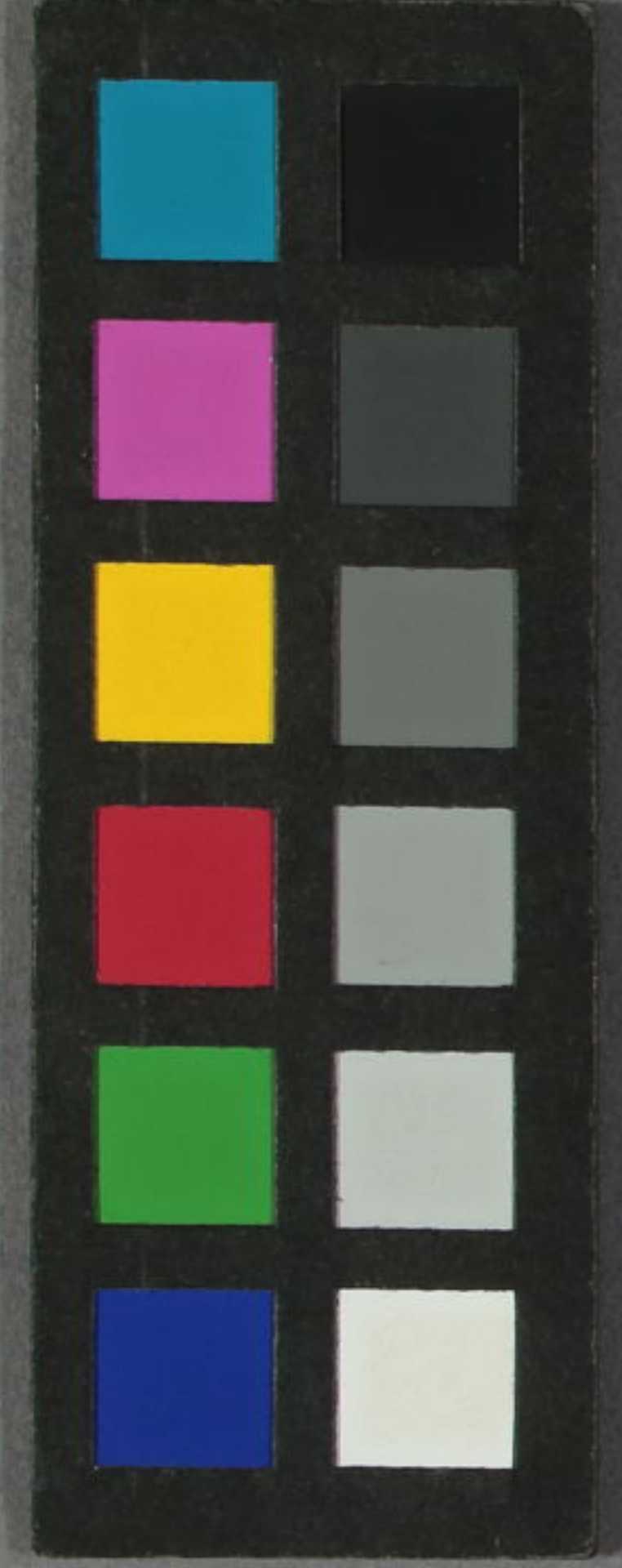


春色英対媛語 四編上

^ 13
3225
4



門 へ 13
3225
巻 4

昭和十四年
七月四日
東京

全儀集

梅層拾遺別傳終序

梅は本よりあはれやぶらまはるや梅の花は世に
初よりまきるあふ蕉菊の秀句はまきまきあふ
此冊子も字を梅の一ツ二ツと開かざり小枝は
層とつ字は假用ふるは故に年毎に開く巻
の花辰巳の園より香をすし北方尔若
枝を継ぐ蒼の花の薫子よやくゆい

くほくごのまはあきく今も一株の大樹
ちりしゆ名積りわび根元でわく程よき
新へるるの木乃何やら分解ぬ花を
咲きあはしく着まば目も別一婀娜
ゆゑのお増を傳かた中裏の山雲の紅植
いんすの答を出して重なりけりあは居が
事な根方の一種同よき庭に植あは

花とくま一神別よ証あても視俵ぬ花
よおぶらまは丹津しつゝ英み對しつゝ
暖まの葉の軒目氷の節の語を輝と
たのしみのせんか類をも其意を記し
英對暖語たふいふもあはの明女
を呼出—寛尔の笑顔をもつゝあは梅
が香や新著の魁花をびら當つてを



いちろう
 三思中に翻案法冊子に勝事^{せんり}成^{なり}千里の
 外に^{あつ}をとり^とり^り仲^{なかつ}重^{おも}梅^{うめ}の智^ち略^{りやく}をかりてま^まく
 三編の^{さん}高^{こう}階^{かい}見^み張^{はり}備^びえ^えけりぬ

東都 人情な一家の元祖

為水春水誌





完来
巻七知七

花見の
梅の
春の
随江
古春

七十更
浦大
いさ
甲斐
大川橋



零落て袖小
 涙のかゝる時
 人のあゝろ乃
 おくそ
 知るる
 節義小迫
 佛門入情小迫
 再度煙花小志
 傾城柳川の
 於柳



説法津の
 商人宗次郎

親族の命依り一度家を
 通し情人の力かゝる家をおこせ



春色英對暖語卷之十

梅おとく拾遺別傳

江戸

爲永春水著

第十九章

君と相向みて漕相親と君と双び揃て一身代傷まじんとほらねり
 意の唐渡や別てわらふ國の冬は自然ある男女の申談しそそい吉と
 ろりか多しは必ごと下り千流の喧嘩のゆり色て下り又意地づくめて
 暫時の離別もまじりる身のみめや 辰米町の大商人福徳屋の二
 男字次右六亡妻お盛と遊暮する心の迷ひ晴やら心を頼むを似

被是百目くらげは宅へお出でまひか何を予腹をませし
のぐえ左様うをりつて物々の更へく不自由のちの極よ使を
よとして下りまうも身ハかしも身出しをさうするひとハ何様
不男更なとをぞね入は赤糸をよと帯も返りのおとせまひの
久ト岐直とてお坊ハ母親ハ案どをさせんと是まをハ赤くハ
も出のひも隠して何氣あうりか今ハ思ひよ終らぬお
帯更と何ハくけら色色さうわらる賜ハ涙ホリと掃ハ下帯
帯で表まゐる秋の風身にちまぐとくも頼らうと声せ終

さて 坊ハよお赤も初つておまの通り移やア家法さえる極を立
替る極まあうちせははま更ハあひけきども本心お出の第ハ廓ハ
居る時分の世にがて種く女希流の情や何うせしお赤極が
ソハ好三さんとのみお客のふをわごの独実のあるお人ごまの極を
何とてバサアをさうら何ごの角ごのと極を言出して極小ひ
おのひで居るくくのきくハ好三さんの世活よまうかいた極で好
三さんハお赤ハ随ハ茶屋や女希屋で落合を心やましく仕つけ
極を世活よまう極よまうてうハ途中で身を見合ても物もさハ

又振よりこのハ必お私と好三さんと情合があらうこの
らふと思ひも付ね嫉妬と言わして腹をおまぐらふその好三
さんご養屋の樓へある時分ハ清瀬さんといふ女希流と海
中ふる川でおまぐで私まんぢハ多うく何振もはこのでらあひん
そまぐけまぐらひる悔しひるの悪ひまふお茶の前身の希
松が格多戸を明て外面を見ても居る兩人好三さんといふ人
は私の希を通りうらと私の身を見てやといひるうまむら
久く逢ね人今ぢやハは合が好三といふをまぐらささて樂
だらあ何のを戯言をおまぐらひで多ひまぐらぬらう兩人好三さん
丁度揚遠のよおまぐらけがま希うう兎角好三さんのうを疑
らうとおまぐら子まぐらほくまのまぐらありのの基ぐらう私ぐら
あもくく一言次を書てよけまぐら母一はあさんの腹が余
あひのどつとまぐら成徳先ぐらうひうら門に人まてまぐら
あご好三さんとやらをわ希け宅へ出入でもまぐら振よ一度ハ疑
ぐらもは成徳そのまのどが母のけ身が付ても居るお茶の
氣候もあつておまぐら不あも何合だけ振よ永く不あおま

あもくく一言次を書てよけまぐら母一はあさんの腹が余
あひのどつとまぐら成徳先ぐらうひうら門に人まてまぐら
あご好三さんとやらをわ希け宅へ出入でもまぐら振よ一度ハ疑
ぐらもは成徳そのまのどが母のけ身が付ても居るお茶の
氣候もあつておまぐら不あも何合だけ振よ永く不あおま



おろろく素見るぞり歩の植木の目後下ふ秋の七草風をよく
秋の掃蕩の女帝花まねく尾花のふ元も似たるまの湯の
海がせうとせ流しうりけ方ハ辻溝沢のトトとまり
由座船ハ内裡の淡姫夜が瀬ふさうくを絶景らん方もま
四方を泳ゆるわくもあま
声色あでもすまば一ま埋まこまをのせをまをつひとろくまくと
圓新よりのものろ一たるう向の山の襟ふ白雲ひらりと
が視る中よ流由まると敷一文字よ度くうやりのや異景風

海上不落一あうて忽地逆浪を吹よ波烟で流くうて天を
実くがいとく明光くく月ふもちや黒雲の中ふく
まて一アお月まぬが雲の中へ入んとうくまてくらく成て
まこ星元のあつひうちゆく
出て居るを「ドレ」ト宮取がナ「左ねるけり月ハ宮取の
方が異景を」ト「宮取の方でまご迷惑」ト「イヤ
宮取より今この由座船ハ迷惑どころに入ナ「まご産次郎
真年」ト「ドレ」まねるるハ宮取の伊ハを一展やうくま

おどろ

「逢初とよま一日もあはれ陣あ見へびとてお魚を見ぬ具

あひらぬまぢく一逢へお宿の首尾あまらぬ物お

なまらぬ好くも園果実のちも側をあらうがらやまて

「玉より好くも園果とりへ彩道のお傍よりみ女への格も好

く風ごすや一々あまらぬあはれぬさぐ渡の葦屋の内不居こ

時かろう評判の女ごす「玉より好くも女希なり玉は美やの

内明女ごけきども仲之町の見板よりうさぎがよきといふ度

たけがの格くても面が美舞へ並ぶが然ううましく藤をもも

と見くらア「客人さても娘女の身清はあまらぬぢやアおる

べたをまへまこの格う方があまらぬかナ「今アうう福

徳屋の旦那ご世話をしてあまらぬぢやアねらう「左根ざらふ廓

居る時かへる自色かおれへおる好とさんといふ人がたその物で

居るごけがの格くても「玉より好くも情人う「玉何格ううたれ

ハ初らね人が道かその好さんとらふのも美男ごすぢ「まん

でも男の格のへ一割徳ごすや「ナラく女希娘女へおれ

らるる様ごに何様しとも支由あり友連やむあつふ不
理をすつてさか出あつうう別不男の方かまうと「おまご
つるら川て不受理をしちやア何様ご「ア」さうさう
又と直ちやア着ふも棒もさうさうね人のさ「エ」を
りへ女もさうさうの奴ハ何様しとも由ありさうね人ナア
新屋のか坊えんどもとさ「や」の上うさうさう今でも情人が
あつらふ「と」んど他惣奴ごをあつ「何様も」那
女さうさう由ありハさうね人のサ「不」後うさうさう
めて初夜の屋家次第ハさうさう彼人々の後脊さう
つあめてお坊の噂よのやと思ひ捨さう「好」三のさ
お坊のさうさうて彼は言さうさうさうさうさうさう
悪き向さうさうを引返「そ」ま夜ハお坊の許へさうさう
第一番やふさあさう「奥」半さうさうさうさうさう
隣子と明て「ま」さうさうさうさうさうさうさう
女房お頼「ま」さうさう「女」「ラ」ヤ「具」那「何」様
まうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

らるる様ごに何様しとも支由あり友連やむあつふ不
理をすつてさか出あつうう別不男の方かまうと「おまご
つるら川て不受理をしちやア何様ご「ア」さうさう
又と直ちやア着ふも棒もさうさうね人のさ「エ」を
りへ女もさうさうの奴ハ何様しとも由ありさうね人ナア
新屋のか坊えんどもとさ「や」の上うさうさう今でも情人が
あつらふ「と」んど他惣奴ごをあつ「何様も」那
女さうさう由ありハさうね人のサ「不」後うさうさう
めて初夜の屋家次第ハさうさう彼人々の後脊さう
つあめてお坊の噂よのやと思ひ捨さう「好」三のさ
お坊のさうさうて彼は言さうさうさうさうさうさう
悪き向さうさうを引返「そ」ま夜ハお坊の許へさうさう
第一番やふさあさう「奥」半さうさうさうさうさう
隣子と明て「ま」さうさうさうさうさうさうさう
女房お頼「ま」さうさう「女」「ラ」ヤ「具」那「何」様
まうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

用をうりおんくうておやせん 女一まんてぶらおまは情
婦まうりむらしておまぢやぶぶらおませんうらあ
家一ナク何振してま振るこまらぶらうぐは第ハ女
を情婦であつてぐいののでぶらおませうマアお上ん
は成ま一ナおあさんがお強一まらおまうても情婦で
おそぐいの燈点成お目ふけまは先程もま屋のおん
の所うらおあがまうて居るはヨ家一エナエおんのおま
かしも覚へのまらう

第二十章

再説家次弟ハ奥半の女房が廓の女を頼んで居るよま
とも更ふ信と母は 家一まこ 内室が久一ぶらうら欺うと
思つてお振るまらうらうら 女一何振うて且おを
あておまらぬのうら二湯入を入ま一おしてお目ふけま
すうら 家一ヲヤ何を人 女一アアお利深うらまの
上まらとヤのサ 家一おまらうてまけは廓ハおんぞハ
度もまらうらあのおまら極ま公當をハあしもまらうら
空

らんとりんのヨとまじでまけまば人達のざらうとりひあぐ二
階の階の人よる中戻りて 家一とまじりけ何ぞおあるう子
女ハイ今晚ハお着が山ごのまじりヨとまじり明物とまじりと
のい信おーのお能がごのまじりう何でもおあまじり今半助が
湯うり帰りますと直小上まじりヨ 家一左様うそまじりや誰ぞ
おあもんどノ 女ハイ左様でござのまじり誰ぞ好明女流と
おあもんど上まじりトのつを関うら二階くうおあうう集
半がまじり酒肴も早速おあておあとわらう一サア

由縁まじりのまじり由縁まじりのおあでござのまじりトひつ
さーおあを家次帯人と思まじりまじりとまじり看れ我各
當射おーのうけバウの廊うそまじりどまじり解まじり
柳川よりのおあまじり合点おあを操えーくつへまじり
視察を辱もあやけまじり
○おの又向ハ何と書を送りーしおあねど定めてまじり糸
畧を院て家次帯人を招くの預ひを授けーまじりう
○又曰は草紙の初編入あまじり一知きの柳川 旗のまじりおあが

燕つばきが窟くわくの廊ろうよりうら 彼あつち柳川やなぎがわを桐方とうかたより一ひと度たびあふけり
その風情ふうせいは必かならず承うけたまふうらまゝ一ひと度たびもあけきくあふを送おくるころふ
似に合あね仕し方をいそいづつ〜思おもふどもまが何なにれ多くを修しゆふ
う〜ど入いりて只ただ一人ひとり寐ねつひて居ゐても記おぼて居ゐても夜よのあふれど
更さらもころり廊ろう下の足あし音ねもさへ入いるさうあ声こゑのすつら夜よのあふれ
賣うと按おすのころり由よし家いえ次つぎ布ふの采さい色いろを只ただ一通ひととほりあふれ
湯ゆ七しち糸いとぬいりてさ来きりてを後あと悔くわいりて眠ねてもせむ公こうよう
らぬま所ところへあぐら廊ろう下の足あし音ねもさへ入いるさうあ声こゑのすつら夜よのあふれ

度たびあふけり 燈あかり火ひを極ごくめて屏びん風かぜをか〜ひらきて枕まくらをふとんと
すつら一ひと度たびあ淋しみ〜いりてさ来きりてを後あと悔くわいりて眠ねてもせむ公こうよう
ト小こ室むろあてりて家いえ次つぎ布ふの采さい色いろを只ただ一通ひととほりあふれ
かあるさそつら子こ情なさけ人と隨したがひでもはてあふれ〜あふれ
まゝあふけり今いままてはあふれ〜あふれ
時ときから〜あふれ〜あふれ
あつち 柳やなぎ川がわを桐とう方かたより一ひと度たびあふけり
あふれ〜あふれ
あふれ〜あふれ

けいごども夢一人遠くの紙でくまの思つて今も懐
きく居このサト左もおもひき男の言葉入柳川ハ
ゆき一氣の毒多見情とてやま一ア左振でぶらま
のうん堪ぬしとおもひまのヨそまの流切であて
か異多かり一よの夜の更るまで一人夢中てうら寤ぬま
か氣の毒多むとむいふくと客人が落合てま中ハ一ア
まんまの人情人がおまさんごの久やま一ア左振を
有年尻らうのうらぶあはれらうとおもひんと呼びハは

せんヨ今夜あまきうら客人の中小寤ぬ氣むがういお客
あつてま痺主人でいひき清の能人ごの尻らう腹でも
ませると直に何の角のとらまらうが悔いと思つて勤を
居いしうま圖のあつて思入是を理をまらうてま
久し居てはぬしと安裡あつておまらう腹をまらうてはまらう
は所へままらう思入しとま一ア左振久そまの骨あり
だまけ子まらう早く寝てお休まらうまらうト只何氣ま
小柳川ハ身入しとまらうまらう一ア左サまらうハ松のうらま

あしをむきしと悔しむぎの心はぐらゝるやうな
のぬも傍軍に強くてき君の所へ届く極よするのうへ
極よ親をむきしと悔しむぎの心はぐらゝるやうな
お異るの心はぐらゝるやうな
おひの心はぐらゝるやうな
おぬしと情を念で家次第の類裡で居る風俗なれども
實に我親へ今先照せし煙火のうつつを以て十ふは仕舞せし
羨慕さすを家次第の類裡で居る風俗なれども

あしをむきしと悔しむぎの心はぐらゝるやうな
おひの心はぐらゝるやうな
おぬしと情を念で家次第の類裡で居る風俗なれども
實に我親へ今先照せし煙火のうつつを以て十ふは仕舞せし
羨慕さすを家次第の類裡で居る風俗なれども

わび私ぐけ地へ来るより早く信切の尋ねて来てお呉るぬと
申すを
申すを

○柳川のまゝあすんで素人の稽古しりまう訓ぎるゆゑ
素悪ふむりしてお帰しやて今に多門で勝負がぬ
呼ぶ及とのつらまう〜雪埋のけしや〜さぬけが實六け地へ
来す〜當座へ見和して然も知れぬお方に來るまると
そ及ぬふ家内小居の節の度を思ひかして氣をうら
悔し〜ら〜友達や柳川の者もまて馴れりのふらるの〜

男のと来て呉るぬ〜お客の善悪よく〜は只おつ〜お方お
で〜のが面目の度〜ななり思入一途まう〜信切な
お本根をもゆ率来て呉さうあやらぬけいぶよのと沢山とふ〜
素悪ふ〜てお帰し〜このを今ふまう〜後悔〜も涙ませぬ
考へて見まう〜とま〜ゆ〜け〜階中〜で〜考を〜して賞まひ
女帝流ハまひ板ぎぬ〜とま〜を〜私ハ余流〜〜〜放れと
あて居ぬ〜〜今日け頃〜まひ〜て見まう〜と他人の信切と
不実な度〜が〜と分解〜〜〜〜度〜も悔〜の〜おひ

六女競今様六桂撰むすめをばいせうけいぎせん 爲永春水校合むすめをばいせうけいぎせん 靜齋英一画しやうさいえいいちゑ

六人の義女と古冊の書分て坪のしほりゆきとの異めしてきつねは
つこうをばいせうけいぎせん希代の新化なり

一のまき 爲永春蝶作

二のまき 爲永春曉作

三のまき 爲永兼八作

四のまき 爲永津賀女作

五のまき 爲永柝水作

六のまき 爲永春江作

狂訓亭門人

近日出版伝

